HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	一八六〇年代・横浜雑居ことばについて
Author(s)	亀井, 秀雄
Citation	北海道大學文學部紀要, 48(3), 93-139
Issue Date	2000-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33756
Type	departmental bulletin paper
File Information	48(3)_PR93-139.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

一八六〇年代・横浜雑居ことばについて

亀井秀雄

一 関心の設定

安政六年六月(一八五九年七月)、徳川幕府が横浜を開港して以来、海外の各地域と、日本列島の各地方から人間が集まり、金品の交易を通して「横浜ことば」(Yokohama Dialect, Yokohamaese)と呼ばれる、独特な雑居ことばを作り出した。横浜の居留地に住んだことのある欧米圏の何人かがそれに言及しており、例えばアーネスト・M・サトウは『一外交官の見た明治維新』(坂田精一訳。Eernest Mason Satow 'A Diplomat in Japan'. 1921)において、「商用のための一種の私生児的な言葉が案出されていたのだ。中でも、マレー語の駄目(ベケ)peggi、破毀(サランバン)は大きな役をつとめ、それに「アナタ」と「アリマス」とを付け加えて、自分は複雑な取引きをやる資格を持っていると、銘々がそう思いこんでいた」と回想している。

また、B・H・チャンバレンは『日本事物誌』（高梨健吉訳。Basil Hall Chamberlain 'Things Japanese, Being Notes on various subjects connected with Japan, For the use of travellers and others.' 1939）において、これをピジン・イングリシュ（Pidgin English）に類するものと捉え、「われわれのほうが、方言として「ピジン日本語」を用いる。初めてこの国に来た人びとは、何かしてもらいたい時には、車夫や女中に分からせるために、この言葉をすぐに覚える。これは開港地においては、重要な商業取り引きの手段として役立っている」と語った。横浜の居留地制度が廃止されたのは明治三二年（一八九九年）であり、チャンバレンがその初版（明治二三年、一八九〇年）を出した時、横浜ことばはまだ生きた言葉だったのである。

それがどんな言葉だったか。具体的な検討は後に譲るが、まずその目立った特徴を一、二紹介しておくならば、チャンバレンによれば、lawyer は consul-bobbery-shto（領事・騒動・人）と呼ばれたという。dentist は ha-daikusan (literally "tooth carpenter"、歯・大工さん）であり、lighthouse は fune haiken-saranpan-nai-rosoku（船・拝見・破毀・ない・蠟燭）であった。

saranpan は、前記のアーネスト・サトウの記憶では、破毀を意味するマレー語だったらしい。bobbery は、平文先生（J. C. Hepburn）の『和英語林集成』（明治一九年、一八八六年）では、Sōdō、sawagi と説明され――その初版に当る、『和英語林集成』（慶応三年、一八六七年）の English and Japanese Index にはまだ登録されていなかった――重久篤太郎の『日本近世英学史』（昭和一六年）によれば、一八六七年の Smyth『海員用語集』が「東印度諸島および支那に多く用ひられる事を註記してゐる」という。

これらの証言を信ずるならば、横浜ことばとは英語・マレー語・日本語などを任意に結びつけた、一種の混成語だっ

たのである。それは多様な言語の持ち主が集まる居留地のなかで、自然発生的に生まれた、雑種語であった。他の資料には、Foster-mother を Chi chi amah（乳・母）と呼んだという例もあり、この amah が阿媽に由来するとすれば、中国語も混っていたことになる。[註一] イギリスの商人が横浜で交易をするに当って、英語を解する中国人を伴って来ることもあったから、その可能性は極めて高い。この中国人は筆談で日本の商人と意志を通じ合って交易の仲介をし、日本人からは南京さんと呼ばれていた。

このような言語をいち早く文学テクストに取り込んだのが、仮名垣魯文の『万国航海西洋道中膝栗毛』（明治三～九年）である。これはその題名から察せられるように、十返舎一九の『東海道中膝栗毛』の明治的ヴァージョンであって、三代目の弥次と喜太八とがロンドンの万国博覧会へ出かけ、未知な風俗や言語に出会って失敗を重ねる、滑稽な旅物語だった。そのなかに、例えば弥次が上海で酔っ払って、支那人から「じやつぱんばんかんどろんけんざんまんみんろう」と罵られる場面が出てくる。

「じやつぱん」は言うまでもなく英語であるが、その次の科白から「ん」を除けてみれば「馬鹿・どろんけん・ざま見ろう」となる。「どろんけん」はオランダ語に由来すると言われ、酩酊を意味する。日本の遊廓では、遊女たちが会話の意味を客に悟られないように、一種の暗号として、それぞれの音節の間にカ行音をはさんで、「イキマカニイケクコカクラ、マコチケナコトイキツケテクコンケナ」（「いまに行くから待ちなといってくんな」。恋川春町作画『金々先生栄花夢』）というような言い方をした。これを唐言という。仮名垣魯文はこれを真似て、唐人（中国人）の科白に「ん」音をはさんで唐言もどきとし、中国人めかした言葉を作ったのである。

彼は一時神奈川県の役人をしたことがあり、神奈垣魯文とも称した。横浜の居留地の風俗や言語現象に興味を持ち、英語・オランダ語・日本語・唐言をチャンポンにした横浜ことばを自作し、作中人物に発話させたのであろう。ちなみに、to mix を意味する champone（チャンポン）もまた横浜ことばだった。

このような言語現象については、前記の重久篤太郎の著書や、楳垣実の『日本外来語の研究』（昭和三八年）など、すでに何人かの研究者が取り上げている。私はそれらに導かれて関心を持ち始め、文献の調査などに多くの恩恵を受けているのであるが、その間私が抱かざるをえなかったのは、果たして横浜ことばを過渡的で、変則的な言語現象と見なしてそれで済むのだろうか、という疑問であった。横浜ことばの面白さに引きずられてしまったためであろう、これらの研究は特徴的な単語の語源詮索や滑稽譚的なエピソードの紹介に流れてしまう傾向があり、記録そのものの検討・吟味までにも到っていないのである。

明治期に入って欧米語圏の人間の日本語研究や、日本語圏の人たちの欧米語の学習と研究が急速に進んでいった。それは、一方では欧米人がその関心対象を江戸口語（Yedo colloquial）へ移し、他方、日本では言文一致運動に代表されるような日本語（文）改良が試みられ、両者の交錯から共通語的な日本語が作り出される過程であった。同時にそれは、横浜ことばが車夫ことばやマドロスことばのなかに一部吸収されて、一種の Jargon（特殊通語）として痕跡を残すのみに終わってしまう過程でもあった。従来の横浜ことば研究は、このような結果を自明の前提とするあまり、その過程を相対化し、批判的に検証し直す視点なしに行われる傾向が強かったのである。

横浜ことば的な現象は、お互いに未知な言語を持った人たちが交渉を開始した場合、いつの時代、どこの地域にも

起こりうる事態ではなかったか。そのように発想を転換してみれば、横浜ことばが普遍的な現象であることに気がつくだろう。事実、日本がかかわったケースだけでも、野村正良の「満州国の言語的外観――満州国の言語的構成――」（『コトバ』、昭和一六年三月）や、川見駒太郎の「台湾に於て使用される国語の複雑性」（『日本語』、昭和一七年三月）などを見れば、満州や台湾において類似の現象をもたらしていたことが分かる。それは一面では皇民化教育による日本語の強制とかかわるが、それとは条件もレベルも異なる領域で発生した現象であった。その点を踏まえて見るならば、実態としての横浜ことばは果たしてどのようなものであったのか、という疑問と共に、それをJargonのほうに押しやった明治期の言語過程は何を意味するかといった問題が改めて起こってくるであろう。

お互いに未知な言語を持った人たちの言語交渉には三つの場合が考えられる。一つはお互いに文字を持たない場合、二つには一方だけが文字を持っている場合、三つには双方が文字を持っている場合である。明治期に起こった過程は言うまでもなく三つ目の場合であり、その意味では限定された事例だったのである。

ただし、その交渉過程で生まれる雑種ことばが交渉空間の共通語と化してゆくか、あるいは交渉当事者の母体集団から変種的なjargonと見なされるか、それとも異質な言語と見なされることになるのか、この問題は、単純に右の三つのパターンと機械的に対応させることはできない。その集団における言語規範の意識や、言語に関する言説のあり方がかかわってくるからである。その意味では、それぞれの集団の規範意識や言語言説などの解明なしに横浜ことば的な現象を研究することには無理が伴う道理であるが、ここではむしろその逆の方法を採ってみたい。それは、横浜ことばと呼ばれるものへの関心や書記の仕方そのものの性格を分析することによって、そこに反映していた規範意識や言説のあり方を逆照射してゆく方法である。その方法を通して初めて私たちは、その後急速に進んでいった欧米人

の日本語研究や、日本人の欧米語の学習・研究のライト・モティーフを見出すことができるだろう。右に三つのパターンを挙げてみたのもその方法の一環であって、学習や研究が制度化された現在から振り返って見るだけでなく、横浜ことば以前のあり方として想定できる交渉状況を常に念頭に置き、そちらの側から横浜ことばを捉え直す視点を忘れないように自戒しておきたかったからにほかならない。

二　横浜ことばと呼ばれるもの

それでは、横浜ことばと呼ばれた言葉は具体的にどのようなものであったか。少し面白すぎるきらいがないでもないが、次に Bishop of Homoco（本牧司教?）と名乗る人物が、明治一二年に出した『改訂増補　横浜方言演習』(Revised and Enlarged Edition of The Exercises in The Hokohama Dialect'. 1879) 及び M. Paske-Smith 'Western Barbarians in Japan and Formosa in Tokugawa Days, 1603-1868' (1930) から、特徴的なものを列挙してみる。用例が豊富で、アーネスト・サトウやチャンバレンの横浜ことばに関する知識も多くはこれに基づき、パスケ・スミスはさらに幾つか補足していたからである。

I　　Watarkshee, also Watarkoosh' (*this latter is only used by owners of coal mines and millionaires*)

You　　Oh my

He	Acheera sto
To break	Serampan
The boat is broken	Boto serampan
Illness	Sick-sick, *also*, Am buy worry
I feel ill, mix me some tea	Watarkshee am buy worry oh char parra parra
Really	Hontoe
Mistaken	Ooso
Difficult	Moods cashy
How much?	Ikoorah?
The price is a penny	Tempo arimas
Strong, well	Die job
Ghosts of departed cattle	Shin danji ooshie abakemono
Colour	Eel oh
A lighthouse	Fooney high kin serampan nigh rosokoo
Church	Oh terror
Give	Sinjoe
Tailer	Start here

Take care	Ah booneye
Food, Sustenance	Chobber chobber
Disturbance, noise	Bobbery
Punishment	Pumgutz
Hammer	Pompom
Physician	Doctorsan
Auctioneer	Selly sto
Foster-mother	Chi chi amah
The great depreciatrion of the value of the paper currency of the Imperial japanese Government renders it impossible during the prolonged absence of my partners to accept your temping offer.	Kinsatz Yah dai oh, Dora your a shee.

Lighthouse の横浜ことばは、ここでは Fooney high kin serampan nigh rosokoo であるが、チャンバレンは funehaiken-sarampan-nai-rosoku と紹介していた。チャンバレンのほうが現代の日本語のローマ字書きに近い。それは彼が日本語研究者として、標準的な発音を設定したかったからであろう。逆に見れば、Bishop of Homoco の綴りのほうが横浜訛りをより忠実に反映していたと言えるかもしれない。ただ、彼は横浜ことばを英語の単語で把える面白さに惹かれていたらしい。you／oh my（おまえ）、Church／Oh terror（お寺）などは明らかに、英語と日本語とのいずれにも通じている読者の笑いを狙った宛て字（?）であった。パスケ・スミスが補足した、Tailer／Start here（仕立て屋）は、それを前提とした一種の謎かけ遊びであり、Auctioneer／Selly sto（競り人）は、seller を sell と接尾辞の er（人）とに別け、この er をしと（ひと、人）に置き換えてみたものであろう。手塚治虫がある漫画で、「田舎のバスはオンボロバスよ」という歌謡曲の一節を、登場人物に、"In a car no bus was on borrow bus yo!" と歌わせたことがある。これはそれに類する言葉遊びを含んでいたと言えよう。

最後の例はそれとはやや異なり、Kinsatz Yah dai oh, Dora your a shee（金札やだヨ。ドル、よろしい）は、日本政府の発行した紙幣に信用がなく、ドルによる支払が求められる状況を皮肉った表現である。

Bishop of Homoco が挙げる横浜ことばは、このように、日本語に由来するものが多かったが、もちろんそれだけではない。先のリストにおける Food, Sustenance／Chobber chobber と、Disturbance, noise／Bobbery とは、彼によれば、外国人と支那人との間で用いられるピジン英語だった。元治元年（一八六四年）に発行された『横浜みやげ』の付録、「異国ことば」という語彙集に、「めしくふを　ちやぶちやぶ」とあり、仮名垣魯文の『西洋道中膝栗毛』にも「サアサアちやぶちやぶがすんだらはやくおひけとしやう」という科白が出てくる。この「ちやぶちやぶ」が Chobber

chobber に当るだろう。[註二] Bobbery については、チャンバレンの『日本事物誌』を紹介した際にすでに言及しておいた。これらの点から判断すれば、Bishop of Homoco がいう「外国人」は、イギリス人（またはアメリカ人）から見ての日本人ではなく、むしろ日本人から見ての「外国人」だったと考えて差し支えない。

Punishment／Pumgutz もまた由来の分からない言葉で、前記の『横浜みやげ』には「人をぶつを　ぽんこつ」という例が見られる。また同じ頃に発行されたと思われる『日本外国商人独通詞（ひとりつうじ）』のなかに「日本詞で異人へ通ずるつかひよふ」という欄があり、「おこるときあたまたゝく　ポンコツシンジヨウ」という例が挙げられていた。この「ぽんこつ」が Pumgutz であるとすれば、『横浜みやげ』の編者はこれを異国ことばと認識し、『商人独通詞（ひとりつうじ）』の編者は日本語と認識していたことになるわけだが、結局は「「げんこつ」と英語の punish との混成語か」（『日本国語大辞典』小学館）とでも推定しておくほかはないところであろう。

横浜ことばの特徴はおよそ以上の如くであるが、ただし注意しておかなければならないのは、あくまでもこれは英語圏の人たちに興味ある言葉を、英語の単語または音節を用いて記録したものだったことである。それは日本人の興味あるいは実用意識とは必ずしも一致しない。日本人の手になる資料としては『横浜みやげ』や、明治元年に出された『外国通商（外国通商）ことば附』、及びこれらを『横浜史稿　風俗編』（昭和七年）に再録した編集者が新たに採集した「横浜類語」などを挙げることができる。それらを Bishop of Homoco の『横浜方言演習』と較べて見ると、重なり合う言葉は意外なほど少なく、しかも横浜で流通する言語としての認識の仕方も異なるのである。

念のために日本人の手になる語彙集から、『横浜方言演習』の横浜ことばと関係するものを挙げてみよう。

茶　テイ
酒にようを　どろんけん
やまい　しつくねす
ものやぶれたるを　さらんぱん
人しぬを　しんだんち
できもの、きりきずを　さらんぱん
てら　ちやあち　（以上は『横浜みやげ』）
いしや　ふいしゝいん
いくら　はまつち
すてる　さらんぱん　（以上は『外国通商ことば附』）
拝見　検査　はいけん
寺（天保はおす）耶蘇会堂　てんぽう　（以上は「横浜類語」）

「やまい」を「しつくねす」と言うのは、Sick-sick と共通する。「人死ぬ」を「しんだんち」と言ったわけだが、静岡県の一部には葬式を意味する「しんだんじ」という方言があり、神奈川県の高座郡では同じ言葉が、死んだ動物や行き倒れの人間を意味したらしい。それが入って来たのかもしれない。いずれにせよこの「しんだんち」が、Ghosts of departed cattle（死んだ畜生どもの亡霊）／Shin danji ooshie abakemono（死ぬ・牡牛・お化けもの？）と共通

する概念を踏まえていたことは確かだろう。

しかし医者を「Doctorsan(ドクターさん)」と呼ばずに、「ふぃしゃいん」(Physician)と呼び、「いくら」をIkoorah?と言わずに、「はまっち」(How much?)と言う。この違いは多分、お互いに相手の言葉と思われる語を挙げていたためであった。もしそういう見方をすれば、Doctorsan／ふぃしゃいん、Ikoorah?／はまっち、という一種の翻訳関係が生まれる可能性もあったことになる。

それに対してTempo(てんぽ)は同じような発音であっても、明らかに使い方が異なる。The price is a penny／Tempo arimasにおけるTempoは、おそらく日本の硬貨である天保通宝を指していた。他方、寺を「てんぽう」とか「天保はおす」とか言うのは、Temple(House)の訛音だろう。あるいは日本の寺をOh terrorと呼び、キリスト教の教会を「てんぽう・天保はおす」と呼び別けていたのかもしれない。横浜が開港された当初、欧米圏の宣教師は日本の寺を借りて病院を開き、併せて布教活動を行っていたからである。

Bishop of Homocoの取り上げた横浜ことばと日本人が採録した異国ことばとは、このように微妙に異なるのであるが、その原因の一つは書記意識の違いにあったと言えるだろう。この時期すでに欧米圏では音韻学が確立されて、植民地言語の採録作業が組織的に行われていた。また日本においては、慶応三年(一八六七年)に出版された平文(ヘボン)先生(J. C. Hepburn)の『和英語林集成』の例でも分かるように、日本語のローマ字表記が試みられている。先ほども指摘したように、チャンバレンはその試みを受けて、lighthouseの横浜ことばをローマ字書きしたのである。

これは前述したように、欧米人の日本語研究がその関心対象を江戸口語(Yedo colloquial)へ移したことと無関係

ではない。ごく初期の欧米人の日本語研究を見て行くと、その人が接した日本語が、どの地方のどんな階層の言葉であろうとも、それがその人にとってのJapaneseであった。だが経験を重ねるに従って、そのなかに地方的な差異があることに気がつき、彼等の興味は、一方では横浜ことばや江戸口語や会津方言などに分節化されていったのだが、他方、政治の中心が江戸にあることから、関心は当然江戸口語に集中してゆき、改めてそれをJapaneseと呼ぶようになる。アーネスト・サトウやチャンバレンの日本語研究はそういう動きに呼応し、またその動きを促すものであった。『和英語林集成』もまたそれに従い、日本語のローマ字化については、序文で"In Romanizing the words, the effort has been in every case to express the sound as pronounced by the most cultivated natives"とことわっていたが、実際に日本語の音韻を説明する時にはYedo dialectを中心に置き、その上でNagasakiやKiyotoおよび南方地域(the southern departments)における差異を説明する方法を取っていたのである。

そういう動きのなかで、Bishop of Homocoはあえて英語の単語(または音節)で横浜ことばを表記した。これは、横浜ことばを一地方語としてよりも、変則的な混成語として認識すると共に、英語と対照させてみた場合のおかしさを強調したかったからであろう。彼が耳で聞いた時の面白さを狙うだけでなく、眼で読んだ時の面白さをも意図したは、このためだったと思われる。じっさいYouがOh myであったり、ChurchがOh terrorであったりする滑稽は、耳で聞いただけではうまく伝わらない。文字を読んで初めてそのおかしさが分かるのである。

その意味で彼の横浜ことばに対する関心の持ち方は、書記意識に支配された面があったことを見落としてはならない。

また同じ意味で、欧米人の伝える横浜ことばには、眉に唾をつけて聞かねばならないものがある。Ohio州出身のア

メリカ人が、日本人からオハヨウと挨拶されて、なぜ自分の出身地を知っているのか、驚いた。そんなエピソードが伝わっている。Bishop of Homoco によれば、How do you do?も、Good Morning も Good day も、Good evening も、横浜では全て Ohio の一語で間に合わせていた、という。先のエピソードはこのようなテクストから作られたものだったのではないか。そう疑ってみる必要がある。「横浜類語」によれば、日本人が欧米人に会った時は「ぐる・もーねん」「ぐる・あふぬーん」と声を掛けたのである。

だが、それはともかく、横浜ことばを採録したり、それによって表現を試みる関心は、居留地の欧米人の間にかなり幅広く拡がっていたらしい。その一例として、次に、Charles Wirgman が明治七年、The Japan Punch 紙に掲載した『ハムレット』の横浜ことば訳を挙げてみる。

Extract from the new Japanese Drama Hamuretu san, "Denumarku no Kimi," proving the plagiarisms of English literature of the 16 Century.

Arimas, arimasen, are wa nan deaska: —— あります、ありません、あれ は 何 ですか
Moshi motto daijobu atama naka, itai arimas. もし もっと 大丈夫 頭 なか、痛い あります
Nawa mono to ha ichiban warui takusan ichiban. 索(なは)もの と は 一番 悪い たくさん 一番
Arui ude torimas muko mendo koto umi, あるい 腕 取ります 向かう 面倒 事 海

Soshite, bobbery itashimas oshimai? Shindanji, neru
Mada; sorekara, neru de hanashi mo yoroshi
Kokoro itai to issen mainichi bonkotz
Ushi ototsan arimas, sore wa dekimashta mono neru: ——
Takusan skimashta shindanji; ——
Neru okata nise haiken; sayo achira skoshi serampan;
Kara ano shindanji no neru, nani nise haikin dekimas
Kono nangai shindanji mono piggy shimashita,
Skoshi mata sinjo.

そして、騒ぎ 致します おしまい？ 死ぬ 寝る
まだ、それから 寝る で 話し も よろし
心 痛い と 一千 毎日 叩く
憂し お父つぁん あります、それ は 出来ました もの 寝る
たくさん すきました 死ぬ
寝る 大方 二世 拝見、さよう あちら 少し 破毀
故 あの 死ぬ の 寝る、なに 二世 拝見 出来ます
この 長い 死んだ もの 取り除け しました、
少し また 進上

Vos valete, et plaudit.
Anata sayonara, soshte te ponpon.

"To be, or not to be, that is the question"を、横浜ことばで"Arimas, arimasen, are wa nan deaska"と直訳してみせたユーモアの感覚は見事というほかはない。このデヌマルクの君・ハムレツさんの科白に対応するのは、ハムレットの独白の次の部分だろう。

To be, or not to be, that is the question:
Whether 'tis nobler in the mind to suffer
The slings and arrows of outrageous fortune,
Or to take arms against a sea of troubles,
And by opposing, end them. To die, to sleep-
No more, and by a sleep to say we end
The heart-ache and the thousand natural shocks
That flesh is heir to; 'tis a consummation
Devoutly to be wish'd. To die, to sleep-
To sleep, perchance to dream-ay, there's the rub,
For in that sleep of death what dreams may come,
When we have shuffled off this mortal coil,
Must give us pause; (以下略)

先に紹介した翻訳は、この英文と、これまで紹介した横浜ことばや異国ことばを参照しても、まだ分かりにくい箇所もあるが、以下、幾つか気がついた点を指摘してみる。

『ハムレット』の "Whether 'tis nobler in the mind to suffer" における nobler を、『新体詩抄』(明治一五年)にお

いて、谷田部尚今（良吉）は「大丈夫（ますらを）」と訳し、外山ゝ山（正一）は「男児（おとこ）」と訳していた。この訳者はその先蹤とも言うべき形で「だいじょうぶ」と訳し、この行全体を“Moshi motto daijobu atama naka, itai arimas”（もし、もっとだいじょうぶ、頭、なか、痛いあります）としたのである。

次の行の The slings を、訳者は索（なわ）と理解したわけだが、それに続く訳がなぜこうなったのか、“mono to ha”の意味を含めて、よく分からない。

ただ、“Or to take arms against a sea of troubles”を、“Arui ude torimas muko mendo koto umi”とした理由は――Or に対応する Arui が「あるいは」を意味するとすれば――それなりに見当がつく。take を「取る」とし、arms を武器ではなくて、腕と解釈し、against を「（立ち）向かう」とした上で、「腕、取ります。（立ち）向かう、面倒（な）こと（の）海」と翻訳したのである。

次の“And by opposing, end them. To die, to sleep――”を、“Soshite, bobbery itashimas oshimai? Shindanji, neru ”とした理由は、by opposing を「騒ぐ（ボバリイ）（→悩ます）」と意訳したことさえ分かれば、理解しやすいだろう。Shindanji が死人や亡霊を意味するだろうことは、すでに触れておいた。

“No more, and by a sleep to say we end”の翻訳の場合は、end がなぜ yoroshi になったのかは不明だが、それ以外はほぼ直訳的に対応している。

“The heart-ache and the thousand natural shocks”の翻訳も同様であって、なぜ natural が mainichi となったのかが分からない点を除けば、それ以外はよく対応している。shocks の訳語である bonkotz は、Pungutz とおなじ言葉だろう。

そして多分、'That flesh is heir to; 'tis a consummation／Devoutly to be wish'd. To die, to sleep ——" という二行の語順を少し入れ替えた翻訳が、"Ushi ototsan arimas, sore wa dekimashta mono neru—／Takusan skimashta shindanji; ——" であった。というのは、"That flesh is heir to" がなぜ "Ushi ototsan arimas"（憂し、おっとつぁんあります?）となったのかは分からないが、" 'tis a consummation"を"sore wa dekimashta"（それは出来ました）とし、"Devoutly to be wish'd" を "Takusan skimashta"（たくさん好きました）と翻訳した、と見ることができるからである。

それに対して、"To sleep, perchance to dream-ay, there's the rub" は、"Neru okata nise haiken; sayo achira skoshi serampan" と、ほぼ対応した翻訳となっている。"Neru okata nise haiken" は「寝る。大方、二世（あの世とこの世）拝見」だろう。次の行の翻訳と併せてみれば、訳者が dreams を nise と置き換えていたことが分かる。そして ay を sayo（さよう）と置き換え、the rub を skoshi serampan（少し破毀（セランパン））と意訳したのである。

"For in that sleep of death what dreams may come" の場合は、For を Kara（故（から））としたことさえ分かれば、'Kara ano shindanji no neru, nani nise haikin dekimas" とした理由の説明は不用であろう。

そして最後、"When we have shuffled off this mortal coil,／Must give us pause;" の shuffled off を piggy とし、mortal coil を nangai shindanji としたわけだが、piggy という言葉については、本論の冒頭、これをマレー語と見るアーネスト・サトウの回想を紹介しただけで、具体的な意味・用法は説明して来なかった。いま改めて説明するならば、Bishop of Homoco の『横浜方言演習』は、Piggy を、"To remove"、"Take away"、"Carry off"、"Clear the table"、"Get out of the road" などの広い意味を持つ横浜ことばとして紹介している。また『横浜みやげ』には、「も

のをすてるを　ぺけ」「人をかいすを　ぺけ」「じやまになるを　ぺけ」「うりかいはだんを　ぺけ」「きにいらぬを　ぺけ」とある。たぶん訳者は piggy を “To remove” の意味に使い、右の二行を、“Kono nangai shindanji mono piggy shimashita,／Skoshi mata sinjo” と翻訳したのである。もっとも、“Must give us pause” を “Skoshi mata sinjo”（少し、また進上）とした理由は不明であるが。

この翻訳がある種の滑稽感を誘うもう一つの理由は、『ハムレット』における英語と横浜ことばとを、一対一の関係で対応させながら、直訳的に置き換えようとする傾向を持っていたことであろう。それが端的に現われているのが最初の一行の直訳であるが、そのほか、

And by opposing, end them. To die, to sleep—
No more, and by a sleep to say we end
The heart-ache and the thousand natural shocks

の部分を、

Soshite, bobbery itashimas oshimai?　Shindanji, neru
Mada; sorekara, neru de hanashi mo yoroshi
Kokoro itai to issen mainichi bonkotz

そして、騒ぎ（ボバリ）致します　おしまい？　死（シンダンジ）ぬ　寝る
まだ、それから　寝る　で　話し　も　よろし
心　痛い　と　一千　毎日　叩（ボンコッ）く

と訳したあたりにもよく現われている。

これは後にもふれるが、当時の日本人の英語学習は英語と日本語とを一対一に対応させる直訳方法を取っていた。右の訳者がその方法を踏襲したのか、それともチャーレス・ヴァーグマン自身が日本人の流儀を真似て、故意に直訳的な誤訳を演じてみせたのか、にわかには判断できない。ただ、右の翻訳が日本人の手になったのだとしても、ヴァーグマンはそれを『ジャパン・パンチ』紙に引用して、日本人の翻訳に対するパロディ的な効果を狙っていたことだけは確かであろう。

三　異国ことばの場合

それでは、日本人の側ではどうであったか。Consul をコンシロウと聞いて「こん四郎」と書き、Minister がメノシタとなって「目の下」と書かれたという報告はあるが、その数はごく少なく、積極的に言葉（文字）遊びをした様子は見られない。それをするには、異人の言葉を仮名書きし、さらに意表をつくような漢字に変換してみせる能力を必要とするわけだが、そういう能力を見せるのは坪内逍遥や山田美妙の世代になってからなのである。『横浜みやげ』の「異国ことば」や、『外国通商ことば附』を編集した人の関心は、そういうところにはなかったのであろう。あるいは横浜で行われている、この奇妙な言葉を採録し、紹介するだけで、十分に読者の興味をつなぐことができると考えていたのかもしれない。それはまた彼等が平仮名や片仮名のような音節文字を持っていたことと関係すると思われるが、ともあれ、その特徴を知るために、右の文献の言葉を、初めから一〇個づつ、次に挙げてみる。なお、（　）内の英単語

は、これらの資料を『横浜史稿　風俗編』に収めた人が附けたものである。

おもふ　とう・しーん（To think）　　せかい　うをるど（World）
なく　とう・からい（To cry）　　てん　へゑうゑん（Heaven）
うたがう　とう・どうと（To doubt）　　ち　ゑあるす（Earth）
教る　うら・いんすてゆりにくと（To instruct）　　そら　ふーるまんめんと
物書　とう・らいと（To write）　　ひ　そん（Sun）
返す　とう・あんする（To answer）　　つき　むうん（Moon）
おくる　とう・りーぶ（To leave）　　ほし　すたる（Star）
うた　とう・しんぷ（To sing）　　あかるき　らいと（Light）
問　とう・あすく（To ask）　　くらき　だあく（Dark）
見出す　うら・ていすと（To taste）　　あつさ　はつと（Hot）
（以上は『横浜みやげ』）　　（以上は『外国通商ことば附』）

「ふーるまんめんと」には英単語を宛てていなかったが、これはFirmamentであろう。英語の動詞を挙げる際、不定詞の形で示すやり方は、すでに万延二年の石橋政方編『英語箋』や慶応二年の足立梅景編述『英吉利文典字類』が取っていた。だが、日本語と英語との対応のさせ方は異なっているし、英語の発音の表

記も一致しない。では、『横浜みやげ』の編者はどこから不定詞形を学んだのか。なぜその一部は、「とう」ではなくて、「うら」となっていたのか。ばかりでなく、ここに掲げられた日本語と、それに対応する異国ことばとして挙げられた英語との間には、意味のずれが認められるものがある。それはなぜか。そういった疑問が湧いてくるのであるが、それらの検討は別稿に譲り、ここでは発音の表記の問題に関心を限定しておきたい。というのは、それらの疑問に答えるためには欧米人の日本語学習や、日本人の欧米語学習の全体に渡らざるをえないからである。

そのことをことわった上で、改めて日本人の手になる語彙集に注目するならば、次のようなことが言えるだろう。つまりBishop of Homocoたちは、このような和訓外国語のなかで居留地の通用語(リンガ・フランカ)化したものと、英訓和語とをチャンポンに使うやり方を「横浜方言」と呼んだ。他方、日本人にとっては、横浜で通用する和訓外国語の全てが「異国ことば」であった。その点では両者の間に微妙な違いがあるわけだが、一般にこれまでの研究者は両方を含めて「横浜ことば」と呼び、そのため原語を連想するのが困難なほど変容してしまった和訓外国語や、語義のずれがあまりに大きいものばかりをピックアップする傾向を生んでしまったのである。

確かに右のような資料の異国ことばには音韻変容や語義のずれの大きいものが多く、本当にこれで異国人相手のコミュニケーションに用が足りただろうかという疑問は禁じえない。そんな疑問が湧いてしまうのは、それらの冊子が実用性と珍しい言葉への興味とを同居させていたからであって、そのへんの事情をもう少し明らかにするために、次に実用会話書と銘打った小冊子を二種類、紹介してみたい。

その一つに安政六年（一八五九年）に出た『和英商賈対話集』があり、英語の例文の左側に片仮名の訓みを示し、さらに片仮名の左側に●や▲の印を附けていた。これは●は「弱クシテ有カ如ク無カ如」く発音し、▲は高調に発音する指

示である。ただし引用に当っては、片仮名、印のいずれも例文の右側に附けることとする。

グーツ　デー　　今日(コンニチ)ワ
good　day.

ウェルコム　　ヨク御出(オイデ)
Wellcome.

アイ　コム　トゥ　バイ　ソムツィン　　私(ワタクシ)ワ買物(カイモノ)ニ来(キ)タ
I　come to　buy　something.

ウヲーク　イン　　御上(オアガリ)ナサレ
Walk　in.

ホワット　ウート　ユー　ライク　トウ　シー　　何(ナニ)ヲ御覧(ゴラン)ナサルカ
What　would　you　like　to　see?

ホ●ワ▲ット●　セル●　アイ●　ショー　ユー▲
What　shall I　show　you?

ホ●ワ▲ット●　ウィル　ユー　バイ
What　will　you　bay?

ホ●ワ▲ット●　ヘフ●　ユー▲
What　have　you?

アイ●　ヘフ●　ソム●　レクウェレット●　ウェール●
I　have some lacquered　ware.

ヘフ●　ユー　エニ　ゴールト●　レクウェレット●　ウェール●
Have you any gold　lacquered　ware?

何ヲ御目ニ掛(カケ)マショーカ

何(ナニ)ヲ御買(オカイ)ナサルカ

何(ナニ)ガ有(アリ)マスカ

青貝物(アオカイモノ)ガ有(アリ)マス

蒔絵物(マキエモノ)ワ有(アリ)マスカ

この小冊子は発音の強弱を示しているだけでなく、日本語文においては当時の仮名づかいを廃して、すべて表音式の仮名づかいを採用していた。当時としては、最も配慮の行き届いた会話書だったと言えるだろう。

他方、小嶋雄斎先生輯・篠田先生閲『商用通語』（安政七年、一八六〇年。刊行年は序文により推定）は、一つの日本語文に対して、△を附けて英吉利（イギリス）語および亜墨利加（アメリカ）語を示し、□を附けて和蘭（ヲランダ）語を示すという特徴を持っていた。

私　△アイ　□イキ
あなた　△ユー　□ミネル
よく御出なされた　△ウェル、コーム　□ウェル、コム
うちへ御上りなさる　△コム、ヲップ　□コーム、ウップ
よい天気で御座ります　△フワイン、ウェーゾル　□フード、ウェール
有かたう御座ります　△モッチ、ヲブライチ　□イキ、ベダンキ、ユー
あなた如何（いかが）御座あるや　△ウワット、イス、ユール、ウヲント　□フー、ハールト、ヘー
何の御用で御座る　△ウワット、イス、ユール、ウヲント　□ウァット、ベシスヘート、イス
あなた御機嫌よく御出なさる　△ハウ、ヅー、ユー、ヅー　□ユー、セート、ウェルバールト
私ハ別条御座らずあなたは如何（いかが）　△アイ、アム、ウェリ、ウェル、ハウ、イシ、イト、ウィヂユー　□レーデレーキ、ウェル、エンヘー
私　不快（あんばいわるい）　△アイ、ガット、シッキ　□イキ、ゲフーリッヘード

ヲブライチはoblige、ウェーゾルはweather、ウィヂユーはwith youであろう。

この会話書には横浜ことば化した単語も入っていて、「私が後刻持て往ませう」を「△アイ、サル、ブリング、バンバイ　□イキ、サル、ファン、アクテル、ヘッペン、グーン」としていた。このバンバイが by and by であることは、Bishop of Homoco の『横浜方言演習』に、By and by／bynebai とあり、『外国通商ことば附』に「のちほど　ばゑんばへ」とあることから推定できる。また「交情」を「△ヱミチ　□フリーンド、スカップ」としていたが、ヱミチは英米語ではなくて、フランス語の amitié であろう。ヱミチが横浜ことばであった例は見られないのであるが、このように英語のなかに混入して、横浜ことば化していた可能性は十分に考えられるのである。

ただし、これを横浜方言の混入と見るか、あるいはこのような実用会話書を通して横浜方言が生まれたのか、の判断については、議論の別れるところであろう。私にも判断はつかないが、ただ一つ言えるのは、居留地の大半の人たちが耳で覚えるほかはなかった状況のなかで、彼等は「正しい」発音や規範的な言い回しに自分の言葉をアイデンティファイする方法を持たなかったし、またそうしなければならない意識も希薄だっただろうことである。とりわけ当時の日本人には標準語の観念はなかった。もちろん方言という熟語はあったが、当時は「くにことば」と訓み、各地方の特徴的な言葉癖や訛りを意味するだけで、標準語や共通語との対比で使ったわけではなかった。その意味で江戸言葉も京言葉も方言であり、吉原遊廓の「ありんす」言葉のような人工語もまた方言だったのである。

そのような環境においては、お互いの話す異国ことばがどんな物を指し、どんなことを意味しているか、その見当がつくことがアイデンティファイの唯一の条件であった。その相互了解さえつくならば横浜の方言たりうる資格を備えていたのである。Bishop of Homoco が挙げた横浜方言は、英語の単語や音節を使ってその滑稽感を強調していたが、当時の欧米人の日本語の発音、つまり英訓和語の痕跡を伝えている。日本人がそれらを英訓和語として了解し、

他方、『横浜みやげ』のような和訓外国語を欧米人がそのものとして了解する関係があったとするならば、それらはいずれも共通の方言であった。その点からすれば、現在の眼から見て不完全なところの多い『商用通語』もまた当時の実情に適った、実用書だったと言えるだろう。

四　耳の問題

そうすると、次に考えなければならないのは、当時の居留地の人間が未知な言葉に接した時、彼等の耳がどうそれを受容したかという問題になるわけだが、それには次の二つの条件を考慮に入れておく必要がある。

一つには、当時の日本人が接した英米人が必ずしも標準語的な英語を話したわけでなく、各地方の方言や訛りで語っていただろう点である。このことは、親しい者の間で交される日常会話の場合、特にはなはだしかったにちがいない。二つには、これは彼等だけでなく、人間は誰でも、初めて未知の言語に接した時、その発音を「正確」に耳でとらえることは極めて困難だっただろうことである。言うまでもないことだが、この場合は相手の文字を知らず、その文字で綴った言葉をどう読めばよいかも知らないわけであるから、自分の側の音節（またはそれを表記する文字）のシステムしか参照するものがない。相手の発話を、その時相手が内的に準拠していただろう規範的な発音や文構造とアイデンティファイする手がかりを持たない以上は、自分の耳が聞いたままを受容して、そこから規範を作ってゆくしかないのである。

そのことを窺わせる資料に、ジョン・万次郎が安政六年（一八五九年）に著わした『英米対話捷径』がある。

よく知られているように、土佐の漁師の子供だった万次郎は天保一二年(一八四一年)、一四歳の時、嵐に遭って無人島の鳥島(とりしま)に漂着し、辛うじて生き延びていたところを、アメリカの捕鯨船に助けられた。アメリカでは船長の好意で小学校へ通い、その後、パートレット・アカデミーという専門学校で高等数学や測量術、航海術などを学んだ。そして十年後の嘉永五年(一八五一年)アメリカの船に乗せてもらって日本へ帰るが、鎖国の禁を犯した罪を問われて、厳しい取り調べを受けたのち、土佐藩の監視のもとで暮らすことになる。しかし、欧米との対応に迫られた幕府は、その翌々年、かれを召し出し、外交文書の翻訳や通訳の任に当らせた。その仕事の間に著わしたのが英会話入門書とも言うべき『英米対話捷径』だったのである。

この経歴から見て、彼はアメリカで小学校のテクストを用いた教育を受けたはずであり、『英米対話捷径』も中浜万次郎訳と表紙に銘打ってある点では、何か底本があったのではないかと推定されるところなのであるが、それにもかかわらずその発音は次のようなものであった。

なお、『英米対話捷径』は英文を縦書きにし、その右側に振り仮名ふうに、発音を片仮名で示し、さらにその右に平仮名で、英語と日本語とを一対一に対応させる形で逐語訳が附けてある。だが、次の引用においては、英文の右に片仮名の発音を記し、一対一の逐語訳は英文の左に記することにした。判読困難な文字は□で示す。逐語訳の平仮名には、その右脇に漢字を並記してある場合もあったが、引用に当っては、(　)内にその漢字を入れておいた。その上、原本では、逐語訳の日本語の下に漢文訓読の返り点(レ点や、一・二点)を附け、日本文としての順序を表示してあったのだが、あまりに繁雑すぎるので、ここでは省略し、その代わりに日本文に改めたものを、↓の次に示すことにした。

I (アイ) am (アム) sorry (ソレ) to (ツ) hear (ヘヤ) that (ザヤク) your (ユーア) Grandfather (グランダフワザ) is (イジ) sick. (セッキ)

わたくしハ きのどくにおもふ ことを きく その あなたが ぢゝ（祖父）さまの あると やまひで——→私は、その、あなたが祖父さまの病いであると聞くことを気の毒に思ふ。

He (ヒィ) is (イジ) a (アィ) little (レッロ) better (ベク) than (ザン) he (ヒー) was. (ウワーシ)

かれ ある すこし こゝろよく より かれの すぎしころ——→彼、彼の過ぎし頃より少し快くある。

He (ヒー) is (イジ) bravely (フーウレ) recovered (リカハダ) again (エケン) but (バッタ) is (イジ) very (ウェー) weak (ウイキ) still. (ステル)

かれ ある ゆゝしく せんかいして ふたたひ しかしなから ある はなはた つかれて いまだ——→彼、再びゆゝしく全快してある。しかしながら、未だ甚だ疲れてある。

Is (イジ) your (ユーア) Father (フワザ) any (エネ) thing (センキ) better (ベク) than (ザン) he (ヒー) was (ウワーシ) this (ゼシ) morning? (モーネ)

ありや あなたか てゝこハ いさゝか こゝろよく よりも かれの すきし この（今） あさ（朝）——→あなたが父御（ててご）ハ、かれの過ぎしこのあさ（今朝）よりもいささか快くありや。

No, (ノー) I (アイ) think (センカ) he (ヒー) is (イジ) rather (ラザ) worse. (ウワーシ)

そふでない わたくし おもふに かれ ある すこしづゝ あしきかたで——→そふでない。私思ふに、彼、少しづ

つ悪しき方である。

He has kept his bed about a fortnight.
かれ ある つひたて かれか やまひのとこに およそ ひとめくり（一回）―→彼、およそひとめぐり（一回）
彼が病ひの床につひたてある（床についてある？）。

I don't know who you are.
わたくし とんと ぬ しら たれさまで あなたを あるを―→私、とんとあなたを誰れさまであるを知らぬ。

I knew him immediately.
わたくし しれり かれを いちはや（速）く―→私、彼をいち速く知れり。

I knew nothing of the matter.
わたくし しる なし ことからを―→私、事柄を知るなし。

I have the honor to know him.
わたくしハ ある かたじけなくも て しり かれさまを―→私ハ辱くも彼さまを知りてある。

He (ヒー) is (イシ) better (ベタ) known (ノーン) than (サン) trusted. (ツラシテ)
かれハ ある よく ものしりで よりも □まへ―→彼は□まへよりも、よく物知りである。

I (アイ) know (ノー) all (アール) the (ズィ) family. (ファアマレ)
わたくし しれり のこらす（皆）を やから（家族）―→私、やから（家族）残らずを知れり。

He (ヒー) is (イシ) a (エイ) person (パジン) well (ウハエル) known. (ノーン)
かれハ なり ひとりの だち（人） よき とも（知）―→彼は一人のよきともだち（知人）なり。

『英米対話捷径』の板本は文字がつぶれているところがあり、特に片仮名は判読困難な箇所が多い。fortnight (ホハフナイ) は、あるいは fortnight (ホハツナイ) であるかもしれない。morning (モーネ) は morning (モーネン)、bravely (フーウレ) は bravely (ウレーウレ) と読めなくもない。だが、それ以外の片仮名は明瞭であって、しかしそれが示す発音は現在の標準的な英語の訓みとはかなり異なっている。このような食い違いが生まれた理由は、おそらくジョン・万次郎が英文の標準音的な読み方を知っていたにもかかわらず、実際に発音する場合は、アメリカの船員言葉や、ニューイングランド地方の訛りを交じえた話し言葉で訓 (よ) んだためであろう。もしそうだとすれば、ここにかれの会話意識が現われていたことになる。かれは日本では寺小屋にも行ったことがなく、初めて文字というものを学んだのはアメリカにおいてであったが、この頃はすでに日本文字も習得していた。片仮名の発音表記にかれの手が加わっていた可能性は極めて高く、その点から考えても、ここに附された発音はあく

までも日常会話レベルのものだったと見ることができる。

以上の推測を間接的に裏づけてくれるのが、平仮名書きの訳語の部分である。一読して分かるように、発音の食い違いに較べて、英単語と訳語との対応ははるかに正確だった。I don't know（アイ ドント ノー）を「わたくし／とんと／ぬ／しら」としたのは、巧まずして発音までも写し取った翻訳となっている。know／knew の発音の違いは表示できていなかったが、知る／知れりと、時制の違いはきちんと捉えていたのである。He is better known than trusted（ヒー イシ ベタ ノーン ザン ツラシテ）は、英文、訳語のいずれにも無理が見られるが、それ以外の訳語に食い違いがあるとすれば、それは、例えば He is a person well known（ヒー イジエイ パジン ウハエル ノーン）の訳語の場合のように、強いて一対一対応の訳語を宛てようとしたためであろう。しかし、その場合でも「彼は一人のよきともだち（知人）なり」と日本語の語順に置き換えてみれば——正しくは「彼はよく知られた人物だ」と解すべきかもしれないが——日本文としては十分に整っているのである。

異国の言葉に、一対一対応の形で、日本語を宛ててゆく学習・解読の方法は、すでに江戸時代、蘭学者たちが行っていた。——先にヴァーグマン紹介の『ハムレット』横浜ことば訳におけるパロディ性を指摘したのは、この点を指してのことである——ここから杉本つとむ（『日本英語文化史資料』一九八五年、解説）の、蘭学の経験を持つ人が協力していたのではないか、という想定が生まれたわけで、確かにそう思って見れば、右の会話における英語の発音にもオランダ語訓みと思われるものが見られなくもない。いずれにせよ、彼が蘭学者と同様な方法を取り、英語の訳語だけでなく、発音の場合も一対一対応の形で片仮名の表記を宛てていた。これは当然のことながら、かれが単語という観念を持っていたことを意味する。

『横浜みやげ』や『外国通商ことば附』は単語を中心に編集していたが、わずかながらも会話の例が見られる。それによ

れば、「おかいなさい」は「ういるゆうばい」(Will you buy)であり、「いかほどひけます」は「はうろうゑる」(How lower?)であり、「まことこまる」は「あいあむうゑりとろうふる」(I am very trouble)、そして「わたくしのいへにきたれ」は「かむまいはうす」(Come my house)であった。『和英商賈対話集』にもWellcome(ウェルコム)や、I havenot received(アイ ヘフノツト リシーウト)というような綴り方が混っていた。実際の会話においては単語に区別するよりは、むしろ一続きの言い方として認識されていたのかもしれない。というより、当時の日本人は、現代の文法論における品詞論的な単語の観念——一つの文における語の位置や機能に関する認識に基づく観念——は持たなかったのである。仮名垣魯文の『西洋道中膝栗毛』には「セル。アイ。ポウル。ユウ。オウト。エ。ガラスオウ。ワイン」「ドウ。イフユウプリイス」「アイヘフノヲモヲル。ストメツキ」という会話や「ホワイ。ゼ。ウインドウ。イスジヨツト」「オンキリールリ」といった応答が描かれていた。小林智賀平(岩波文庫『西洋道中膝栗毛』「校訂覚書」)は、これを、"Shall I pour you out a glass of wine?"、"Do, if you please"、"I have no more stomach"や、"Why! The window is shut"、"unclear"と判断している。ここには単語を書き分ける意識も見られるが、一続きの言葉を単語化した表現が混在していたのである。

それに較べてジョン・万次郎の単語別けの意識は明確だったが、ただその発音の捉え方は『横浜みやげ』の編者とさほど変っていなかったと言わなければならないであろう。

異国の言語を耳で捉えるのはこのように困難であったが、最近、横浜ことば的な現象の原点とも言える資料が翻刻された。それは小林亥一の『文久三年御蔵島英語単語帳』(一九九八年一一月、小学館)である。

小林亥一の解説によれば、文久三年四月（一八六三年六月）、アメリカの商船ヴァイキング号が、伊豆諸島の一つ、御蔵島（みくらじま）に漂着した。この船には二三人のアメリカ人の船員と、四六〇人の広東人とが乗っていた。ヴァイキング号はアメリカの材木を香港で売り捌いたのち、ゴールドラッシュで湧くアメリカの金鉱の労働力として、賃金の安い広東人を雇い入れ、運んでゆく途中だったのである。島民は二百数十人。初めはそれに倍する異国人の集団を恐れたが、危害を加えられる心配がないことを知って、遭難者の世話を焼き、最後には酒（焼酎）を供し、船員たちの「踊り」（フォークダンス?）を村中総出で見物に出かけるほど親しみ合った。なかでも熱心だったのは栗本市郎左衛門という若い島役人で、船員との交渉の間に、船員から貰ったらしい手帳に英語の単語を書いてもらい、それに発音と意味とを書き加えていった。それが小林亥一のいう『文久三年御蔵島英語単語帳』である。

栗本市郎左衛門は御蔵島に生まれ、幼い時から読み書きの習得に熱心で、盆に撒いた砂に文字を書いて練習をしたという。「当時、御蔵島には寺子屋もなく、文字を解する者もごく限られていて、学問を指導する人は、住職以外にいなかったのであろう」と小林亥一は推定している。努力の甲斐あって、彼は一七歳の若さで、伊豆の代官から書役（かきやく）見習に任命された。当時の御蔵島の村政は地役人、名主、年寄、書役によって運営されており、かれはその末端に位置したわけだが、記録によればアメリカの船員との交渉の中心的な役割を果たし、これといったトラブルも起こさず、無事に船員と広東人とを横浜へ送り届けた。三二歳の時のことである。

この簡単な紹介からも分かるように、彼は伊豆の本土において学問を修める経験は持たず、まして外国語に類する言語がどれほど異質で、これを学ぶ行為はどんな手順を踏むべきなのか、多分ほとんど知らなかった。日本の仮名文字を知るに際して「いろは歌」を学んだか、五十音図で学んだかは、異質な言語を聞き書きする上で重要な違いを生

んだと思われる。当時の五十音図は現在のそれとはやや異なり、「オ」と「ヲ」の位置が入れ替わっていたが、ともあれ音節のシステムをうまく視覚化したこの図表は、音韻への関心を促す有効なきっかけとなりえたからである。彼に文字の手ほどきをしたのが寺の住職だったとすれば、おそらく「いろは歌」から入っていったであろう。そういう制約にもかかわらず、「西洋黒船遭難一件記」のようなドキュメントや英語の単語帳を残しえた能力の高さには驚かざるをえない。全く予備知識のない言語を持った集団に接して、わずか二ヶ月半の間にそれだけにことをやってのけたのである。

彼の単語帳の語数は（地名や人名を除いて）およそ三四〇。船やその備品、釣り道具や魚、天候に関する単語の比率が大きいのは当然のこととして、Nose（ノウシ／はな）、Eye（アウエ／眼）、Feet（フウテ／足）、Hand（ヘンロ／手）など、身体の各部分の呼称の聞き取りが、Cock（カーケ／金玉）、Fvok（Fuck）（フワーケ／玉門）にまで及んでいる。これは、好奇心のなせる業であろう。ともあれ右のような条件を念頭に置いて、次に、彼の単語帳から、これまで取り上げた『横浜みやげ』や『英米対話捷径』のことばと重なり合うものを摘出してみる。

Stars	シターシヤ	星	Sun	サンナ	月（日）天
Moon	ムーノ	月	Glass	ガラース	硝子湯呑
Sky	スカーイ	天	Drink	ルレンキヨ	上戸
Father	フワウラ	父親	Hot	ハツテ	暑サ
Sick	セケ	病人	Well	ワヲ	全快

All	ヲー	皆々	Good グール	上手壱番　物能キ云也
Hear	ヘヤー	耳聞	House ハフス	家
Bed	ベウテ	蒲団	Taste タイスト	舌なめる

このような単語のほかに、アルファベット（A.B.C……）の訓み方を示した表が三つあり、一つの表ではDをリウと訓み、他の二つではDをデーまたはセーと訓む、というような重要な違いが見られるのであるが、いずれにせよ彼は、アルファベット一つ々々の発音が必ずしも単語の訓みと対応しているわけではないことを知って、これはやっかいな言語だと思ったにちがいない。それに較べて日本のかな文字の場合は、その発音を知れば、それで綴った言葉を読むのにさほど不自由はないのである。

ただし、彼がこの片仮名どおりに英語を発音していたかどうかは分からない。子音で終わる英単語を仮名書きする場合、All／ヲーのように子音の発音を省くか、あるいはSun／サンナ、Moon／ムーノ、Hot／ホツテのように、母音を補って仮名書きするほかはなかったからである。右のように書きつつも、彼自身の発音はもっとアメリカ船員のそれに近かったかもしれない。

もう一つ考慮しなければならないのは、彼が持っていただろう御蔵島訛りの問題である。先ほども注意を促しておいたように、当時の日本は各地方の方言（くにことば）が併存しているだけの状況だった。そういう状況のなかで「いろは歌」や五十音図の文字は、実際には方言（くにことば）の訛りで発音されていた可能性が高い。御蔵島で生まれ育った栗本市郎左衛門はその土地訛りを修正する必要などいささかも感じないで生活していたはずであり、だから右のような片仮名は現在の私た

ちのように発音するのではなくて、訛りのままに訓んでいたかもしれないのである。

事情はジョン・万次郎の場合の同様であっただろう。彼は土佐訛りを持った少年として、アメリカの捕鯨船の船員や水夫と接した。しかも栗本市郎左衛門とは違って文字を知らず、船員や水夫の言う言葉を耳で聞き覚えるほかはなかった。そして帰国してから日本文字を学び、英語の会話文にルビを振ったわけだが、そうして見れば、例えば彼がSickをセツキと書き、市郎左衛門がセケと書いたのは、子音で終わる語に付加した母音によって生じた違いであって、実際の二人の発音は文字で見るほど異なってはいなかったのではないか。そう考えることも出来よう。語末の子音のdをルまたはロと書く傾向は両者に見られ、市郎左衛門の場合はDrinkまでもルリンキヨと書いている。『横浜みやげ』などにも同様な傾向があり、次に紹介する清水卯三郎の『ゑんぎりしことば』には、

ことばのしりの卜また下にとゞまるものハ、たゞそのこゑを、つよくつゞむるのミなり、（中略）また丿ルときこゆることあり、たとへバ「グードデイ（よき ひ）」を「グーリデー」また「グートモルニング（よき あさ）」を「グルモーネン」などいふがごとし

といったことわりが見られる。これは当時のアメリカ語の癖が反映しているのかもしれない。

なお、市郎左衛門の単語帳にも、ごく僅かではあるが、How do you do／ハリルウ（おはよう）、Go with me／ゴワーツミー（同道）、Open the door／ヲプネツドーラ（戸明）、Shut the door／シヤテドーラ（戸立ル云）などの例

があり、ひと続きの慣用的な言い方を単語のように扱っていたことが分かる。

以上は限られた例であって、もし当時の英語・仮名表記における音韻構造を調べるのが目的ならば、『英米対話捷径』や『文久三年御蔵島英語単語帳』の単語全てを分析しなければならない。だが、これらの例からだけでも、少なくとも幕末期の日本人の英語との接触や受容の姿をかいま見ることは出来るだろう。

そしてそのような受容状況を同時代人として照らし出し、それ自体としても重要な一歩を踏み出していたのが、万延元年（一八六〇年）に横浜で出版された、清水（瑞穂屋）卯三郎の『ゑんぎりしことば』であった。

彼は武蔵の国に生まれ、江戸に出て箕作阮甫に就いて蘭学を修め、慶応三年（一八六七年）、三九歳の時、パリの万国博覧会に参加する幕府の使節団に随行して、アメリカを廻って帰ってきた。のち、瑞穂屋と名乗って西洋書籍や器械、薬種類を商ない、実業の道を歩んだが、他方「かなの会」を結成して言文一致の運動に努めたことで知られている。

しかし彼が『ゑんぎりしことば』を出したのはフランスへ渡る以前のことで、杉本つとむ（前出）によれば、それは蘭文英学書（Van der Pijl; Gereenzame Leerwijs voor degenen, die de Engelsche taal beginnen te leeren）を種本としていた。確かに次のような例文は、オランダ語で書かれた英語入門書から採ったものであろう。

われハ、おもふに、かれハ、いへに、ゆきし　アイ、ベリイウ（おもふ）、ヒイ、イス、ゴーン（ゆきし）、ホーム（いへ）

かれらハ、かれの、いへに、おられたり　ヴェイ、ハフ（おったり）、ベン、ヱット、ヘル（かれの）、ホース（いへ）

われハ、かれに、あふ(逢)ために、おもむく　　アイ、ヱム、ゴーイング、ツ(ために)、ミート、ヒム

だが、たとえ種本があったとしても、日本人に供するためには、その内容を消化吸収した上で、大幅に書き換えなければならない。その努力の跡をよく示しているのは、次のような、自分の作った記号と英語の発音に関する注意書きである。異国のことばを音韻のレベルから理解する試みとして貴重な資料であり、少し長くなるが、発音注意書きの全文を翻刻しておく。

こゑのつかひかた

一　ゑんぎりしと、あめりかハ、そのことば、おなじきといへども、あめりかハ、なまるこゑあり、たゞ[ア]ぬき(アカサタナハマヤラワ)[ヱ]ぬき(エケセテネヘメエレエ)[オ]ぬき(オコソトノホモヨロヲ)のこゑハ、いとまぎらわしくして、わがたふとき、やまとびとの、ごとくあきらかならぬゆゑに、なれぬひとハ、きゝとりがたし、たとへバ〔ファット(こゆる)〕を〔ヘット〕あるひハ〔ハット〕と、きくひとあり、また〔ブォクス(はこ)〕を〔バクス〕あるひハ〔ベァクス〕と、きくひとあるがごとし、またやまとのひとに、なきこゑあり、またかなづかひのことなるあり、いまこゝにそのことをあげしめす

一　ことばのしりの[ト]また[ド]にとゞまるものハ、たゞそのこゑを、つよくつゞむるのミなり、たとへバ〔コールド(さむき)〕を〔コール〕また〔ライト(あかるき)〕を〔ライ〕といひ、〔ノット(なき)〕を〔ノッ〕といふ、されども、その[ル]ならびに[イ]のこゑをつよくいふて[ド][ト]の、こゝろをふくむなり、また[リ][ル]ときこゆることあり、たとへバ「グードデイ(よきひ)」を「グーリデー」また「グーモル(ママ)ニング(よきあさ)」を「グルモーネン」などいふがごとし

一 ル のもじに ル、かくのごとくたてすじのあるものハそのこゑをほのかにいふべし、たとへバ〔フォール四〕を〔フォー〕また〔イステルデイ(きのふ)〕を〔イステーデイ〕のごとくいふべし、またあめりかびとハ、ことばによりて ア ヤ ワ といふ、たとへバ〔ハイル(ひ)火〕を〔ハイヤ〕また〔イステルデイ(きのふ)〕を〔イスタデイ〕(ママタはチアのつめこゑなり)〔ウェーゾル(ひよりなり)〕を〔ワザ〕(ママザはゾアのつめこゑなり)〔シル(きみ)君〕を〔シヤー〕といふがごとし、また「ラリレロ」かくのごとくあるものも、またつねの「ラリレロ」のこゑとことなるなり

一 グ のこゑも又ことばのしりにありていちじるしからぬことあり

一 ネ・ウ ト・ウ ラ・ウ かくのごとく、もじのあいだに、ちいさきほしあるときハ、ひろいよみのしるしなり、たとへバ カウ ハ、やまとかなにて「コオ」また「コー」の、ごとくよむならひなれども、いまこのふミにあぐるものハ、もじのごとくよむべし、「コオ」「コー」とよみたがふことなかれ

一 コー カー ツー かくのごとく、もじのしたに、ますぐなる、たてすじあるときハ、そのこゑをひきのばすしるしなり、たとへば コー ハ コ の、のべこゑにして「コオ」、また カー ハ カ の、のべこゑにして カア とよふ(ママ)べし、そのほかなぞらへしるべし

一 シエ リエ キエ クオ ツオ チア キア チエ ニエ かくのごとく、こまかきアイウエオのもじをそばだておくものハつゞめてひとこゑにいふべし

一 テイ ハ チ と テ の、あいごゑにして、はをむすび テ という時ハそのこゑをなすなり

一 ツ ハ ツ と ト のあいこゑなり ツ といふごとく、はをむすび ト といふときハ、そのこゑとなる、また ヅ ハたゞそのこゑをにごるのミなり

一 シ゛ ハ シ とチ のあいこゑなり、これハはのあいだに、したをすこしいだして、うちにひきいれてシといふこゑなり

一 ツ゛ ハ ツ とチ のあいこゑなり サ゛ ハ ツァ、また セ゛ ハ ツェ、また ソ゛ ハ ツォ のごとし

一 ダット カット シット かくのごとく、こまかき ツ のもじのそばだてあるときハ、そのうハごゑをつよくつきこむべし、たとへバ ニッポン日本 カッテ勝手 などのごとし

一 ン ハ ン とネ のあいこゑなり

一 ヲ ハ ヲ とア のあいだにして ワ にちかし

一 ハヒフヘホ かくのごとくかたハらにたてすじある「ハヒフヘホ」ハ、そのこゑを、いと、つよくするしるしにして、ファ フィ フェ フォ とおなじきなり、これハうハ(う)ばへ(は)をしたくちびるに、すこしさハりていふときハそのこゑ、いとつよくいづるなり

一 ワ ハ ウ とア のあいこゑにして、ウア とひと口にいふ時ハ、おのづから ワ となる、このぐあいをもて、ウェ ウィ ウォ をいひならべ(ママ)し也

一 ウァ ウィ ウ ウェ ウォ かくのごとくもじのかたハらに、たてすじのあるときハ、みぎのくだりの「ウァ ウィ ウェ ウォ」と「バビブベボ」の、あいこゑなり、ゆゑに「ウィンネゴル(酢)」を「ビンネゴル」ときゝ「ウェリグード(よろしき はなはだ)」を「ベリクート」ときゝたがふ、されども「バビブベボ」ハくちびるよりいつるこゑなり「ウァ ウィ ウ ウェ ウォ」ハ、うわばをしたくちひるにしかとあてつゝ「ウァウィウウェウォ」といふ、こゝろもていふこゑなり

一　はなしによりて、ものゝなのうへに、ヅェまたヱのもじなどを、おくことあり、これハたゞそのものを、きめることばにして、それ、その、など、のこゝろあり、くわしくハまなびならふて、しるべし

一　みぎのほかなほことばのなまり、ふしのあげさげ、ならびにはぶきことばなどハそのくにのひとにしばゝいひあふてしるべし（一部亀井の附した読点あり）

「ア ぬき」とか「ヱ ぬき」とかと彼がいう、「ぬき」は緯（よこいと）の意味で、この場合は五十音図のア段の音節やヱ（エ）段の音節を指す。つまり彼は五十音図に基づいて、日本語の音韻と英語の音韻との差異を示そうとしたのである。

また「ハ|ヒ|フ|ヘ|ホ」の発音を説明するのに当っては、「うハば（うへのは）をしたくちびるに、すこしさハりていふ」と説明し、「ウァ|ウィ|ウ|ウェ|ウォ」の発音に関しては、「うわばをしたくちひるにしかとあてつゝ「ウァウィウウェウォ」といふ、こゝろもていふこゑなり」と解説する。このような発音上の注意は、オランダで発行された英語入門書から採ってきたものかもしれないが、それを五十音図に従ってアレンジしたのは、言うまでもなく彼の独創であった。また、日本語の発音との差異を示すために、幾つかの記号を作り出し、特に、ー（たてすじ）については、ラ行音の脇につけた場合は「そのこゑをほのかにいふ」、ハ行音の脇につけた場合は「そのこゑを、いと、つよくする」と規則化して、かえって紛らわしくなってしまった。とはいえ、まだローマ字化の着想がなく、発音記号を知らなかった時代においては、最良・細心の試みだったことは疑いえない。

日本文において「トウ」「ラウ」「カウ」などの表記がなされた場合、「トオ」「トー」「ロオ」「ロー」「コオ」「コー」と訓む傾向が強いが、二字それぞれを別けて発音しなければならない場合があり、二つの音の間に記号を挟んで「ト・

ウ」「ラ・ウ」「カ・ウ」とする。彼の注意はそこにまで及んでいたのである。これらの記号は一見わずらわしいようだが、

あめ　天　　ひより　てんき　　ウエーゾル
もちづき　まんげつ　フォルムーン　　かわ　ながれかハ　リ・ウル

のような例でも分かるように、かなり英語の発音に近づくことができる。これに『和英商賈対話集』における強弱の記号を併せ用いるならば、この時代に考えうる、最も効果的な英語発音法を手に入れることが出来たであろう。

彼が『ゑんぎりしことば』に着手する以前、英語のネイティヴに接していたかどうかは分からない。安政の大獄、桜田門外の変、尊皇攘夷運動と続く時代状況のなかで、もし接触する可能性があったとしても、その機会はごくわずかであっただろうが、その代わりにオランダ語の英語入門書があった。その点では、彼の英語の入り方はジョン・万次郎や栗本市郎左衛門と対極的であったが、「正しい」発音や音韻への関心は複数の異国語との接触によって促進されるのかもしれない。そのことから振り返って見れば、ジョン・万次郎や栗本市郎左衛門の体験がもう少し明らかになってくるだろう。

五　結　語

ジョン・万次郎や栗本市郎左衛門のように、未知な言語を持つ集団に出会う体験を、いま言語に関する経験に焦点を合わせて捉えてみるならば、それは相手の声をうまく聞き取ることができないという困惑、あるいは恐怖の感情であっただろう。自分たちのほうが集団的に優位にあると判断できる場合、侮蔑や滑稽感が先行するかもしれない。しかし、ジョン・万次郎や栗本市郎左衛門はそういう位置に自分があるとは考えられなかった。そのような場面で、相手の声を語として分節化（アーティキュレイト）しようとしても、その仕方が分からず、自分の言葉の音節システムにアイデンティファイしてみるしかない。もし仲間が一緒にいたとすれば、仲間の聞き取った音節構造と自分の聞き取ったところとを互いにアイデンティファイし合うほかはない。常識的に考えれば、相手の声を鸚鵡返しに反復して、相手にアイデンティファイさせる方法も取りうるはずであるが、そもそも相手の声をどのような幅で区分けして反復すればよいのかも分からないし、自分の咽喉はその声の音韻を再現できないのである。

現代ふうに言えば、かれらは、根源的（ラジカル）な他者性（アザアネス）を備えた異人（フォレナー）に出会ってしまったわけだが、いわゆる異文化パニックに陥ったわけではない。未知な言語を持つ集団に出合って経験しただろう恐れは、かならずしも常に異文化パニックを惹き起すとはかぎらないのである。事実この時、市郎左衛門がやったことは、「手品・身振・仕打等、彼是ヲ以テ、勘（かん）へ合セ」て、相手の状況と意図とを把握することであった。その意味で意図の把握は言語の認知に先行し、声を語として知覚する基盤となる。彼等はステマ（Steamer／蒸気船）がブローコ（Broke／破）したことを訴えて、ボータ・

ポーウス（Falls・Boat／艀下ル）するために、ウレツケンナ（Rigging／縄檣子）を求めた。意図は物に付着（つい）ている。彼の理解した語の意味は場面のコンテクストに依存して、その語の一般的な概念とずれているものが多い。だが、場面内の意図から見れば、そうならざるをえない。つまり語は場面と意図に付着し、意図は物に付着しているのである。

市郎左衛門の単語帳はそういう体験の痕跡だったと言えよう。彼は文字を使う人間だったので、相手にも文字があることを知り、手帳に書いてもらうことにした。

Silk	セロツク	蚕マユ
Maccaroni	メツカロウネ	素麺
Mushroom	マースン 支那トンク	椎茸
go away	ペケ コーワイ	向行ヲ
Comeshaw	カムシウ	物好（上下）

これによって「ペケ」という横浜ことばは船員が持ってきたものであることが分かる。Comeshawを、小林亥一は不可解としていたが、あるいはアメリカの船員がCommissionの綴り間違えをしていたのかもしれない。『横浜みやげ』の「異国ことば」には、「もらうことを かみしよ(Commision)」「ものをくれるを かみしよよろ(Commissioned)」「くれぬを かみしよな（Commission not)」「もらうたるを たんきよ（Thank you)」とある。[註三]

このような受容のプロセスは、ひとり言語の場合だけでなく、異文化接触のさまざまなレベルで起りうることであ

ろう。ただし、そこから直ちに、相手の言語や文化のシステムの把握に進み、また翻って自分たちのシステムの解明に向うか否かは、これは別な問題である。この受容のままで固定してゆくことも十分にありうるからである。この巨視的な見方からすれば、「正しい」把握への要請とは、それ自体が一種の脅迫神経症的な衝迫であって、これも異文化パニックの一つとすれば、それは自他のシステムの相違を問題意識化し、両者の違いを強調する言説が流布された段階で起る現象だ、と言えなくもない。相手の情報が共同観念的な先入観を作り出しうるまでに与えられた段階で、異文化パニックと言える現象が発生するからである。

ともあれ、市郎左衛門の単語帳から英語を除き、片仮名と語義だけを残せば「異国ことば」と同性質のものとなる。――「異国ことば」の英語は『横浜史稿』の編集者の手による――見方を変えれば、「異国ことば」もまた市郎左衛門的な体験の痕跡の集積なのである。

それに対して、残念ながら、アメリカの船員の言語的体験を伝えるものは残っていない。ただ、Bishop of Homocoの『横浜方言演習』に拠って判断するならば、彼が英語の単語や音節を使って再現してみせた日本語は、欧米人のカタコト日本語の痕跡でもあったはずである。しかし彼等は多分そんなことを自覚せずに、互いに相手の言葉と考えるものを使って、例えば欧米人は寺をOh terrorと言い、日本人のほうはChurchを天保(はおす)と言い、欧米人の「横浜方言」と日本人の「異国ことば」の間に一種の翻訳関係さえもが成立しうるような、多言語の空間を作り出していた。そのなかでは誰もが幾分か他者性を帯びてしまう。横浜ことばと呼ばれる資料から窺われる横浜はそういう空間であった。

註一　Charles G. Leland の、Pidgin-English sing-song or, Songs and Stories in the China-English dialect, with a vocabulary (4th edition, London, 1897)には、"Amah, a Chinese nurse. Hindu, *ayah.* In Mandarin dialect, *lowmar*" とある。

註二　前掲書に、"Chow-chow, to have a meal. In Mandarin, *chih fahn*" とある。

註三　村松守義著『英和双解　隠語彙集』（明治二〇年五月　金港堂）に、「Commission, a shirt. 膚衣（ハダギ）。襦袢（ジュバン）」とある。あるいは、この意味かもしれない。

（日本文化論講座教授）